

JR奥羽本線神宮寺駅西北の旧羽州街道沿いに、戸数300ほどの大仙市北檜岡地区がある。

かつては集落を国道が貫いていて車の往来も多かったが、バイパスができた今は住人以外の行き来はまれだ。

多郎兵衛稻荷神社はこの集落の一面にある。多郎兵衛とは、この地域の地主であった鈴木多郎兵衛家のことである。江戸時代の中頃、この辺りの開田を進めた多郎兵衛家は、他人の土地を通らずに隣町の刈和野まで行けたというほどの大地主だった。

その屋敷内にあったので多郎兵衛稻荷神社の名がある。鳥居の前に建つ2体の仁王像は、石像ながら赤と緑に彩色され、その表情はいささか漫画チックというか現代風で、由来を知りたくて神社講中の方を訪ねて話を伺ってみた。多郎兵衛家は戦後地元を離れて東京に移り住んだ。

仁王像自体は明治40年代作の無彩色の石彫であったが、今から15年あまり前に多郎兵衛家の血筋の人

仁王様は怖くない

が、業者に依頼して風化防止の塗装を石像に施した。その途中で、阿吽像を赤と緑に彩色することを思い立ち、ペンキで塗らせたのだとか。

それが結果として、いささかユーモラスな印象すらある現代風の仁王像になってしまった。無彩色だった時代は子どもたちが怖がっていたというが、今はむしろ愛嬌すら感じられる。

2011年の震災で赤い阿形像が倒れてしまった。講中の人たちは重機を使って像を起こし、緑色の吽形像とともに、後ろに支柱を立てて像を支える仕掛けをつくった。

多郎兵衛家の若勢(地主の家で働いていた人たち)の家系の人たちでつくる多郎兵衛講中は、かつては20人ほどの集まりだったが、高齢化も進み、今は10人ほどになった。その講中の人たちは今も毎年7月第2日曜日の縁日は、境内の草刈りをして、「飲み方」をするしきたりになっている。

多郎兵衛親方(地主当主を地元ではそう呼んでいた)はもういないけれども、支柱に支えられた極彩色の仁王像は、これからもこの土地の歴史の生き証人であり続けるだろう。

集落を貫く県道67号の中ほどに緑濃い熊野神社の鎮守の森があり、その向かい側の細い小道を入ったところに多郎兵衛稻荷神社はある